

---

# Battle Santa

光臣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Battle Santa

### 【ZPDF】

Z6068Z

### 【作者名】

光臣

### 【あらすじ】

サンタクロースが主人公のファンタジー物です。笑い人々、シリ  
アス人々、RPG要素人々に多少香辛料が加わった感じで仕上げて  
いきたいと思います。

## 前書き的なやつ（前書き）

小説初挑戦です。

誤字脱字、駄文になるかと思いますが

生暖かく見守ってくださいませ。

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

## 前書き的なやつ

今年も時期が来た。

1年に一度、子供達が夢を叶える日。

そして、家族、恋人、様々な人間が愛情を深める日。

逆に去っていく日…。

まだ無知な子供達は

「きっと自分の所にもサンタさんがやってきて、プレゼントを届けてくれる」

そんな夢を抱き、当日を迎える。

徐々に大人になつていいくに連れてそんな夢も消え失せ

「サンタなんていない。寝たふりをしていたら父親がプレゼントをくれた…」

そんな現実を突き付けられ、少しづつ大人へと近づいていく…。

しかし

「良い子にしていたらきっとサンタさんがきてくれる」「

いつまでもサンタの存在を信じている純粋な子供達の所へ

『サンタ』は必ず現れるのだ。

それは父親でも母親でもなく、恋人でもない

紛れもないサンタクロース。

老若男女問わず、夢を叶えてくれる魔法使い。

今年もきっと彼は現れる、人々の夢を叶える為に……。

## サンタ

ここは一年中、雪が降りしきる極寒の大地。

腕に覚えがある冒険家はあるか、強靭な肉体を持つ戦士ですら足を踏み入れないほぼ未開拓の土地。

ほぼ北極圏に近いため、動植物の活動もほぼ見られない。

その寒さと過酷な環境に適合できる生物は海洋生物くらいである。

そんな誰も足を踏み入れない秘境とも呼ばれる大地で暮らす

風変わりな種族がいた。

外見上は人間と変わらないが

一切の食事の類は摂らず、空気と水だけで何百年も生き抜けるのだ。

そんな異常な発達をした彼らだが

年に一度。

必ず故郷を離れ、彼らなりの『食事』に出かける事がある。

その食事を行わなければ、次の食事の時期までには死んでしまつといつ

これまた変わつた種族なのである。

食事と言えば

通常は何らかの食品、あるいはそれを調理してできた料理を食べる形が一般的である。

しかし、彼らの食事とは

『人々の夢や希望など』の心を摂取する事である。

食事をする為に、彼らは人の心を読み

その者の欲する物品を入手、または作成、望む事を極力叶える。

対価として対象の満たされた心を貪するのだ。

正の心を食すれば、摂取した側も善良な心の持ち主になり

また来年も同じように、食事をする為に一仕事する。

これがX, masという

彼らが一年に一度、外界へ唯一出かける事が出来る日。

人々がサンタと呼ぶ種族なのである。

## ヒゲ親父だけがサンタとは限らない

この世界のサンタの総人口は

意外に少ないと思われがちなのだが、実はかなりの数が存在する。

人間、亜人、エルフといった夢や希望を持つ

高度な生物の人口を合計し、60億とするならばその半数の30億  
はいる。

食事の対象はなにも人間だけとは限らず、

植物やモンスターといった言葉を持たぬ者からでも摂取する事が可能な為

新たな生物が生まれると同時に

サンタの人口も比例して増える。

生殖活動や、分裂の類ではなく

前触れなく出現、むしろ発生に近い形でサンタは生まれるのだ。

世界の種族でも1・2位を争つほど総人口の多さから

もちろん食事の競争率も高い。

毎年、満足な食事を行つ事ができず絶命してしまつサンタも少なくないのだ。

若いサンタほど仕事の経験が少ない為、要領を得られないのでは

激しい競争に負け、次々に命を落とす。

逆に高齢になつたサンタはその分、何度も何度も仕事の経験をしている為

若いサンタよりも食事の成功率が高い。

故に、人々が運良く見かける事が出来たといつ

赤い服を着たヒゲつ面の爺のような姿のサンタは

間違いなくベテランのサンタであり

その田撃例も多い事から

サンタ＝ヒゲ爺という固定概念が生まれたのだ。



## 競争により対立、それからの戦争

食事を摂れば摂るほど彼らは仕事を覚えるのは当然だがそれ以上に、彼ら特有の『魔法』と呼ばれる技術も飛躍的に上昇する。

食事の質が良ければ良いほど、魔法技術の質も上がり

食事競争に勝てる確立も上がるのだ。

### 魔法例：

アラーム： 鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サーチ： 住居などに侵入可能な出入口がない場合、壁や天井などをすり抜ける事ができる。

スルー： 気配を殺し、限りなく目視不可能なレベルにまで体を透過させる事が出来る。

食事を争い、抗争や対立するサンタも少なくない。

小さな抗争から発展し

大規模な戦争が巻き起じる場合もあるのだ。

生き残る為とは言え、過酷な生存競争を日夜強いられているサンタ  
だが

世界の総人口は毎日約20万という単位で増え続けている為

比例し、人口を増やし続けるサンタの人口も減る事はないようだ。

近年、サンタの中でも

『正の心』は競争率が高い為、あえて『負の心』を食すサンタが急  
増し

赤い正装ではなく、全身真っ黒の衣装を纏つた

通称『ブラックサンタ』が急増し始めたのだ。

彼らは、『負の心』を栄養としている為か、非常に好戦的であり  
腹黒く、邪悪な魔法を使う。

純粹な『正の心』は非常に希少価値が高いのだが

『負の心』は今までサンタは手を出せなかつた為か

純粹で尚且つ凶悪な心を手に入れるのは容易い事もあり、

質が良ければ魔法の質も上がるという特徴から

ブラックサンタ勢が優勢なのは言つまでもない。

現在、サンタの世界では

『正の心』を重んじる派閥『サンタクロース』と

『負の心』を重んじる派閥『ブラックサンタ』が対立を起こし

交戦状態が続いているのだ。

外界に赴く前に必ず一度は大規模な勢力戦が繰り広げられる。

その日は食事の日の前日。

『イブ』と呼ばれるサンタ達にとっては最悪の日なのである。



競争による対立、それからの戦争（後編）

世界観が長つたるくて申し訳ございません。

次からは本編に移ります（汗）

## 名前を持たないサンタ

自然発生すると言つても過言ではないサンタの生態は

彼らに血の繋がりや家族と言つた概念を持たせない。

生まれた時から一人で生き抜く最低限の力と知恵を持つてしているのだ。

しかし、いくら故郷で生活することは言え

一人の力ではなんともならない場合もある。

最悪な場合、

生まれた瞬間に好戦的なサンタから攻撃を受け

消滅してしまうケースも少なくはない。

まさに運も生き残るには必要不可欠な能力なのである。

幸いな事に良心的なサンタの集落の傍で生まれた者は

なんとか食事の時期までは生き残る事を約束されるのだが

それぞれの集落では、やはり生き抜くために

厳しい掟が存在するようである。

今日もまた

サンタが住む大地、『アークチック』に新たなサンタが発生した…

生まれたときから赤い服を纏い

赤い帽子を被り

赤いブーツを履いている姿。

最近は輪廻の関係で

生まれた時から全身真っ黒の衣装に包んだサンタも発生するらしい  
が…

このサンタは赤。

つまり、発生した時点では

『正の心』を栄養にする『サンタクロース』に該当する派閥である。

サンタ達には交配や生殖機能は存在しないのだが、性別はある。

食事を摂る場合、大抵は男か女かで対象が2種の性別を持つ為それに合わせてサンタも性別を分けたのだと思われる。

遠慮といつ言葉を知らない豪雪。

吹雪の中に赤が目立つ。

次に特徴的なのは腰ほどまである長い髪。

全体的に露出度が高い衣装。

傍から見れば物凄く寒そうに見えるが、

寒さに対する耐性は生まれつき非常に高い。

ぱっと見ただけでこのサンタは『女』である事がわかる。

初めて見る景色、吹雪にも全く動じず

平然とどこへ向かつか模索しているようである。

親といふ者はサンタの世界に存在するはずもなく

自分の名前はおろか、自分の家族や仲間も知らず

ただわかるのは、己の目的のみ。

( まことにをすればいいのか… )

彼女はやや途方にくれたような顔で

あたりを見渡している。

生まれた瞬間から孤独という耐え難い試練を受ける

一人でも生き抜く力を

己で身につければならないサンタならではの苦行であった。

世の中運があればなんとかなると思つ

吐いた息に含まれる水分も一瞬で凍りつき

まるで宝石の様にキラキラと光沢を帯びる。

辺り一面真っ白な白銀の世界。

太陽の光は、空を覆う厚い雲の隙間から差し込みはしているもの

積雪に反射し、よつ一層白さを強調する。

方位磁石などもつてはいない彼女は方向感覚も麻痺し

一応、まっすぐ進んでいるよつではあるが

実は同じ場所をぐるぐる回つて居るのではないかと思われる。

もし、彼女がサンタでなければ

この全てを凍りつかすよつな寒さと

真横から、真上から、あらゆる方向から吹き付ける吹雪に耐え切れず

確實に遭難、もしくは命を落としているであろう。

進む方角も安定しない、かと言つて動かなければなにも始まらない。

彼女の生存本能は自然と足を前に運ぶ。

だが、些細な振動や気温の変化で雪崩が起き易い山の傍は避け

偶然発見した木の棒で前方を確認しながらの歩き方。

さすがはサンタといったところである。

生まれて早々、雪崩やクレバスに巻き込まれ命を落とすわけにはいかないと

体が既に生存本能として彼女に教えていられるようである。

一体どれほどの時間が経ったのかわからないが

休憩を挟みつつではあるが

確実に体力がすり減らされていく。

いぐり寒さに強いとは言え

長時間、外気に晒されていれば体力も奪われる。

一体何キロ歩いたのか、距離を測る術もあるわけがなく  
実は生まれ落ちた場所からそれほど進んでもいないのではないかと  
いう

不安にも駆られる。

一向に天気は安定する気配もなく、

容赦ない吹雪がまるで煙のように舞い、視界を奪つ。

( まづは集落を探さないと… )

なんにしてもまづは、ゆっくり体を休められる場所の確保。

これが最優先である。

しかし、地図もなにもない状態では

視界の3メートル先からは、もはや白一色であるこの大地で

集落を見つけるなど、

真つ暗な部屋の中で落としたコンタクトレンズを探すようなものである。

まあ…ほんと無理に等しい行為であることには変わりはない。

運という能力がないサンタは大抵この辺で

襲われるか体力がなくなり消滅するかのどちらかで

サンタの基礎能力が試される第一の試練のようなものなのである。

辺りを見渡しながら、彼女は休憩を取りながら体力の回復を待つていた。

相変わらずの吹雪だが、時間によつては若干

視界が空ける時があることを学習したようで、その時を待つているよつだ。

(ん…あれは…)

突如、彼女の視線の先には  
うつすらと赤い点が見えた。

自分が着ている衣服と同じ色の赤。

白と赤と灰色…彼女が生まれ落ちて初めてみた色の中で  
最も安心する色である赤の点。

自分の視線の先に何者かがいるという事は瞬時に把握できた。

つこせきほじ生まれてから

今までずっと探し求めていた色である事に間違いはなかつた。

## 会話のドッヂボール

迷わず目先の赤い点に向かつて走り出した。

目標である赤はいくら視界が悪くても見失うはずもなく  
真っ直ぐ視界に捉えられる。

向こうも近づいてくる彼女に気付いたらしく

走るよりも更に早いスピードで近づいてくる。

こうこう時、人は「おーい！」など叫び声を出して

自分の存在をアピールするものだが、彼女はそんな事も知らず

ただ真っ直ぐ走っているだけである。

「…………お…………い…………！」

前方の赤い点の方から始めて聴く音が聞こえた。

吹雪の音ではなく、なぜか安心できる音。

初めて聴いた彼女は少々驚いたが

敵意のような物は感じなかつた為、更に走る速度を上げる。

「こんなところに一人でいたら危ないよ……？」

合流し、二人は対話できる距離まで近づいた。

彼女の視線の先には、自分と似たような衣服を纏い

見たことない乗り物に乗り、前方にはやはり見たこともない動物が  
いた。

自分の姿も把握できていない彼女は、

おそらくはこの前方にいる動物と一緒に形をしているのだろうと理解し始めた。

「あ～…もしかして…生まれたばつかなのかな？？」

一方的に田の前の動物は、自分に向かつて音を投げかける。

その意図や、意味を理解できない彼女はどうしたらいいのかわから

ない。

なにしろ初めて聞く音であり、対処の仕方もわからないからだ。

「大丈夫！始めはみんなそうだったから…とりあえずここは危ないから…」

目の前の動物は自分の隣を空け、ポンポンと手をそこに上手にせりへいる。

「集落まで連れてつてやるから…」ソーサー乗りな？」

大袈裟なジエスチャーを織り交ぜながら、乗り物に乗るよつに催促する人物。

彼女は首を傾げながら、一体この人物はなにを伝えよつとしているかといふ

真意を探るが…

敵意や悪意が感じられない事から、信用できると確信した。

おそらくは隣に来いと云えよつとしているのだらうかと、彼女は理解し

なんとかその乗り物に乗りこんだ。

「しかし…女のサンタとは…珍しいなあ…きっとみんな優しく教えてくれるよ」

一方的に音を発する人物の口元を見ながら

もしかしたら自分も同じような音を発する事ができるのではないかと思いつめた。

自分の足で走るよりも早く

しかも快適な乗り心地な乗り物にも驚きを隠せなかつたが  
どうすれば自分の感情や、思いを伝えられるか

彼女は頭をフル回転させ、必死に考えているようだ。

風を切る音がうるさく、先ほどまでやはりわからない音を発していた人物だったが

音がかき消されよくわからない。

しかし、彼女は食い入るように口元を見つめながら

その真似をする事から始めているようだ。

「一度覚えたらもう忘れないから…焦る事ないよ…」

彼女の気持ちを察してか、この人物は優しい言葉をかける。  
意味もなにも通じてるはずもないとわかつてはいるようだが  
それでも彼女を励ますようにひたすら一方的に言葉を投げつけてい  
る。

前方から突風が吹き荒れ

油断していた彼女の帽子が宙に舞う。

「…………あ…………」

彼女の口から初めて音が出た瞬間であった。

## 学ぶとは誠実を胸に刻むこと

「『めんな…僕はまだ『リスニング』の魔法が使えないから…』

魔法・リスニング： 相手の思つてる感情や、欲求などを感じ取れる。

言わば読心術のようなもの。

先ほど吹き飛ばされた帽子はすぐに回収され、彼女に戻された。

疲れた彼女を気遣つてか、この人物が拾つて届けてくれたのだった。

孤独から救つてくれた他に

自分の印、唯一自分に与えられた品物を届けてくれたこの人物に対して

彼女はなにか温かい物を感じた。

こういう時、人は一体なんて言うのだろう。

彼女はもじもじしながら、彼が自分にそうしたようだ

なんとかジエスチャーも交えながらなにかを訴えようとじてこる。

彼の目を見ながら、帽子を指差し

「…………あ…………あ…………つ…………」

言葉にはなっていないが必死になにかを訴えている。

そんな彼女の仕草を見て彼はちゃんと、なにを訴えようとしていたのか

なんとなくわかるよつた気がしたよつだ。

「ああ……そういう時はね……『ありがと』っていりうんだよ……」

しっかりと彼の口元を凝視し、形を記憶する彼女。

何度も口をパクパクさせ、なんとか音を発しようと試行錯誤する。

「あ……い……あ……と……」

なんとか出てきた言葉。

しかし、まだ言葉といつには粗末でよく耳を傾けなければ、聞き取れないレベルの音であつたが彼はしつかりと聞いていたらしく

「どういたしまして!」

屈託のない笑顔でそれに応えてくれた。

まだいろんな言葉がわからない。

しかし、彼の笑顔は言葉はわからなくてもなんとなく思いが伝わつた。

彼女はそんな笑顔を見て

自分も無意識のうちに笑顔になつっていた。

会話とも呼べない代物だが

初めて相手との思いのやつとりが

言葉といつもで成立した瞬間であり、彼女にとつては大きな一步となつた。

嬉しいという気持ちと同時にもつと意思の疎通を味わいたい。

もつと知りたいという気持ちが高まつていつた。

サンタはそういう感情の昂りや、純粹な嬉しさ、悲しさ、怒りなどで

独自の能力が開花する場合がある。

魔法であることは変わりないが、これも彼らなりの

生きていくための手段、つまり環境適応力とでも言ふべるのだ。

彼とのやり取りの中、彼女は始めての感情や、感情の昂りを感じ

自分でも知らないうちに一つの魔法を覚えていたのだった。

魔法・トーク： 自分の思つてる感情や思いを  
相手の心に直接伝える事ができる。

しかし、魔法の使い方もわからないので

彼女はその魔法を覚えた事すら気付いていない。

だが、彼はすぐに彼女が魔法を覚えた事を察する。

魔法が使えるものは、相手の魔力を感じる力に長ける為

魔力の強さの度合いによって、具現化された光などを感じたり見る  
事が可能なのだ。

「なにか…魔法を使えるようだね…魔法の使い方を教えてあげる

「…………」

言葉などの表現などとは違い、魔法はジエスチャーで簡単に伝える事ができる。

集中力がいる為、彼は一度乗り物を止めて彼女に自分の真似をする  
ように

なんとかジエスチャーで教えていく

少1時間ほど粘った甲斐があつて

彼女は自分に宿る魔力を集め、魔法の発動までできるようになった。

まだ彼女の魔力は低く、充分な発動とは呼べないが…

覚えたばかりの魔法・トークを使い

彼の心に直接気持ちを伝える事ができた。

彼の心に直接伝わった言葉は

たった一言『ありがとう』だった。

## 帰れる場所

彼女は魔法・トークを覚えた事により

現在、乗り物で彼も暮らしているところの集落へ向かう最中で

彼は言葉を発し、彼女は心に訴えるところ会話を成立させながら

移動している。

彼女もあまり魔法・トークばかりに頼つていては

いつまで経つても言葉の発声法などを覚えないと感じていたので

といつも発声法の練習を織り交ぜながら

それなりに気を許せる仲になっていたのだ。

「でも驚いたよー生まれてすぐに魔法を覚えるなんて…」

(それって…珍しい事なの?)

「うん！絶対に君は魔法の資質が高いんだよー僕が保障する

！」

(でも…私もよくわからな…これが最初で最後のまほー？に

なるのかもしれないし…)

「あまり悲観的に考えるのよくなじよ…魔法つてこいつのはあつ  
かけさえあればすぐ覚えるわー。」

「…………ひ…………か…………んて…………きつ…」

「んーなんて説明すればいいのかな…後ろ向きにならなこいでつて  
ことだよー。」

(わかった…がんばるよつよあるよ)

そういうじじいの内に、一人の視界の先には小さな建物群が出現し  
た。

彼が言つていた集落である」とこれは間違いないようだ。

遠めでもポツポツと赤い服をきたサンタが

なにかをしているのがわかる。

「ほーりーあそこだよー。まやは長老のところひいて連れてつてあげるー。  
あつと歓迎されるよー。」

真つ直ぐな笑顔を見せる彼は、彼女の肩を叩き

彼女も視界に集落は収めているのだがそれでも

集落の方を指差し、嬉しそうに感情を昂らせている。

サンタは、生まれた場所が集落の中という事 자체が珍しくかなりの確立で人里離れた雪原や、険しい山岳地帯で発生する事が多い。

数々の説があるが、おそらくは

何年、何百年もの昔、そこで命を落としたサンタの魔力により再び発生しているのだろうと書つのが定説になつていて、

大抵のサンタは故郷はない。

しかし、運よく最初の集落を発見した場合

そこを自分の故郷と決めるサンタが大半である為

実質的にその集落で永住するサンタが多い。

集落に到着した二人は、彼の先導の元この集落の長と呼ばれるサン

タの家へと向かった。

彼が言つたよつて、長は快く彼女を受け入れてくれ、この集落での生活を許可してくれた。

しかし、この集落でも少々厳しい掟はあるらしい。

それに従わない場合は追放される事も覚悟しておいたの事であった。

「生まれたばかりでお疲れじゃね？ 今日はもうくつと休むがいい……確かに空き家が……」

「ありがとうございます……」

「あまつ腹まらなくとも良い……この集落はもうあなたの故郷じゃ……」

…

「ふ……ぬ……ん……と……？」

「あなたがいつでも帰つてこられる場所じゃ……」

「「めんなれ」……わからない……」

「ほつほつほつ……今はわからないじゃね？ が……そのひかわかる

…

「そのひか……でも……私は……知りたい……」

…

「ああつー田でなんでも知りつとかのせ毒じや……簡単な」  
から少しづつ覚えていけば良い」

(言葉を発するのは疲れます…)

「ほつほつほ……言葉も今日覚えたてのよひじやからのお……では  
もつ一つだけ簡単な事を教えよつ」

「はー……」

「おかえり、と、ただいま、じや…」

(それはつづでは…)

「いこや…」の言葉はつづでーつ、じつちか片方だけ覚えても意  
味がないのじや…」

(難しい…)

「こやな」…簡単じや…誰かが集落に帰つてもら『おかえりな  
れこ』と呼つ…

自分が集落に帰つてもら『ただいま』と呼つ…たつたそれだ  
けじやよ…」

(どんな意味の言葉なの?)

「あれも…もつ少し声で生きたりわかるよひくなる…とつあえず  
言葉だけは覚えておきなれこ…」

「はい…」

彼女は一日で膨大な情報量を記憶したため

そろそろ精神的にも肉体的にも

限界を感じ始めるほどに疲労が溜まつてきていた。

「では改めて歓迎しよう……おかげり…新たなサンタクロースよ  
…」

「たつ…………た…………だい…………ま…………」

彼女はまだ理解する事は出来ないが

奇跡的に生まれた日と同時に

彼女の帰れる場所、つまり故郷が出来た。

この嬉しさはまだわからないだろうが…

これから先数十年も経てばきっと彼女も理解する事になるであら。

あいつがどうして言わされたら誰でも嬉しい

翌朝。

彼女はやや謹がしい音で起床した。

前日は、長の話を聞いた後、連れられた家についた後

かなり疲れが溜まつていたりじくすぐで寝てしまつたりして。

空き家ではあるが内装はしっかりと家具が揃えられ

時計や、一日毎に勝手に口付が更新される不思議なカレンダーまで  
設置してある。

まるで彼女がこの村に来るのを知っていたかのような

用意周到さであると思わざるを得ない感想だったらしい。

だが、彼女はそんな難しい事を考える間もなく、

家の外の様子が気になり、すぐに身支度をして家の外へ出た。

「おー起きてきた起きてきた!」

「おー！君が新しいサンタかあ～！」

「おつ…女だぞおい！女…！…！」

（我也是……）

言葉を発するのはまだ慣れていないらしく

とりあえず田に留まつた全員に魔法...トーケによる心への直接的な挨拶をしてみたようだ。

「うおーーークだぜーれー！」

うそだろお……生まれたばかりじゃないのかよ！」「

おしおしおし……」やあ……す……逸材たな……」

自分が唯一使える魔法・トークで挨拶した事により

周囲のサンタは驚きを隠せない表情をしている。

( 使ひきなかたんだるか )

彼女にとつてはもちろん初めての体験である為

驚かれる事に対してもそうだが、一度に複数の相手と会話をする事は

非常に困惑した表情を浮かばせる。

「 いじりじりじりーーあまり彼女を困らせいやだめだよー。」

すぐ近くから聞きなれた声が聞こえた。

昨日彼女を拾ってくれた彼が、他のサンタを抑制しに現れたのだ。

「 おつ……お……は……よ……」

「おひな」が徐々に聞き取れるレベルにまで

言葉の発声は進歩している。

「おはようーー！よく眠れたかな？昨日、長から聞いたと思つナビ  
わつわく誕通りこ…」

（一度に、2つも話題を変えられると…）

「 いじ…「めん」めんー今からわづかこの集落の修練所にきて  
もりつナビ…平氣だよね？」

（修練所？）

「サンタとして最低限の魔法を覚える為の場所だよ。捷にもある

…」

「あーのー、村長さんもたしかに…」  
…言つて…た…」

「うんー、その場所を案内するねー！着いてきてー。」

「はー…」

「はいはいー！みんなも修練所にこいつねーー。」

今日も相変わらず、彼は生き生きとした表情で

彼女には爽やかな笑顔を送る。

そんな彼の性格や優しさは、今の彼女にとつては非常にありがたいものであつ

唯一、緊張しながらも元気に相手だと断言できるのだ。

( ありがと )

彼女は彼から教わった『ありがと』といふ言葉がすぐへ気に入つたらしく

彼からなにか教わったりするたびに意識して多用するようしている。

彼も彼女から『ありがとう』と言われるたびに

更に優しく、尚且つ親切で丁寧に事を教えてくれるので

満更でもない様子なのは明らかだ。

修練所は意外とすぐ近くにあった。

彼女に『えられた家から歩いてほんの4～5分の場所にあった。

なかなか大きな建物で

ぱっと見50～60人は余裕で収容できるほどの規模である。

先ほど彼がちらつと言った言葉

『サンタとしての最低限の魔法』がすぐ気になり始めていた彼女  
だが

これからいろいろ教えてもらひる事に對してワクワクしている。

「んじゃ……僕は中等教育だから……案内できるのはここまで…」

「うあ……う……ヒー……？」

「生まれたばかりのサンタはまでは初等教育から学ぶんだー。それで初期魔法や、いろいろな言葉を学べてすぐ」トークを使わなくても良いくらいに、会話が上達するよー。」

（それは楽しみだ…私も早く、君と言葉でいろいろ会話したい…）

「そう言ってくれると嬉しいよー！大丈夫ー！君ならすぐこの中等までこれるよー。」

「が…んば……る…ー。」

「初等修練所はこのドアからずーっとまつすべへとひだりへりー迷わない」と思つよー。」

「あ…りが……ヒー…」

「頑張つてー。」

彼との会話もそこそこ、彼女はせっかく初等修練所へと赴いた。

プレゼントってなにそれ美味しいの？

彼女の田の前には、

『初等』と書かれた立て札がかかっているドアが立っている。

躊躇なくドアを開いた。

意外と初等に集まっているサンタが多い事にびっくりした。

11月に集まっているサンタはほとんど田舎と同様に

生後1週間も経っていないサンタばかりだ。

なんとなく親近感を持つた彼女はとりあえず開いている席へ着席した。

やはりまだ言葉による会話を楽しむところベルまで

発声法が上達していないサンタが多く

教室はどうようとした静けさを醸し出している。

しかし、

彼女も魔法は使えるので

高い魔力を秘めている者は何名かみつけたことができた。

彼らも同様に自分が魔法を使える事は

すでに確認済みらしく、何回か目線がぶつかる事が多かった。

なにか違和感を覚えた彼女はもう一度あたりを見渡す。

先ほど外で

自分が『女』という性別だという事に対して驚いていたサンタがいた意味が

ここになんとなく理解できた。

初等にいるサンタは自分以外全員『男』だからだ。

それほど、女のサンタといつのは珍しいといつ事なのだろうかと

彼女は眉を潜め、なにか考えを巡らせるが

考えても自分にはわからない理があるのでうと云ひ結論に達し

これ以上難しい事を考えるのは止めようと、考える事はストップした。

田の前には大きな黒板、その近くに教壇がありまるで学校のような内装を髣髴させる。

しかし、装飾は見事にクリスマスを匂わせるツリー やリースや電飾が施されている。

なかなかお洒落な教室だな」と彼女は僅かに微笑を見せた。

なんの前触れもなく、一同の田の前に教師らしきサンタが立つていった。

教壇の近くには誰もいなかつたはずなのだが、気付かれる間もなく一瞬にして

そこには立つといたかのよつて立つていてる。

明らかにこじこじるような若いサンタではなく、ベトランのサンタであると田視でわかる。

「はーい！ みなさんも気付いてるかと思いますが、今日も新しいサンタが来てます～」

透き通った聞き取りやすい声で、軽く一同に今日入ったばかりの彼女の紹介を手早く済ませた。

「よ…………しく…………おね…………が…………しま…………す…………」

振り絞るよつになんとか言葉で挨拶をした彼女。

やはりまだ発声は慣れていないので

非常に聞き取りにくい言葉だったが

それでもなんとか言葉で挨拶を交わした事に一同は賞賛し

惜しみない拍手が送られた。

「はいーでは新しいサンタに先生からプレゼントです」

(プレゼント~)

聴き慣れない言葉に彼女は思わずトークで先生に問い合わせた。

「プレゼントとは……サンタには必須な情報であり一番重要な事柄

です。

相手の気持ちを理解し、相手が今一番なにを欲しているのかを察し

相手を喜ばせる事が出来る贈り物です

(よくわからないうけど…すくべ大事なのね…)

「そのとおり! 今貴女が一番ほしこものは…まだプレゼントできませんが…」

「この集落で生きていく以上! 貴女には呼び名が必要です! 先生がプレゼントしてあげます!」

「よ……び……な……?」

「心配いりません、初等の授業内だけで使う呼び名ですか?」

(呼び名とはなに? )

「固有名詞を表す言葉で…名前のよつなものです…まあそれは追々説明します…では…」

言葉とトークで会話をしている一人を

不思議そつに見つめる他のサンタ。

なんでこの先生は一人でべラべら喋つてこむのだからつと

頭の中がハテナでいっぱいになつてこるのが大半のよつである。

「はい！決まりました！貴女の呼び名は『クリス』です！  
皆さんー彼女をこれから『クリス』と呼んでくださいね」

「く……りす……」

不思議となぜか知っているような言葉…

彼女は少し照れながらも

特別な気分に浸り、やや顔を赤く染めていたのだった。

## 魔法よつなじゅつめかね会話術

初等では、まず魔法よつも言葉による会話を先に教え

スムーズに会話が成立したら合格。

その後、やつと魔法を教えるとの事。

しかも、初等で教えてもらえる魔法はたつた一つ。

だが、サンタにとっては3種の神器とも呼ばれている魔法の一つであるらしい。

黒板に50面全ての文字が（この世界の言語は日本語）書かれ  
一文字づつ発声していく、

それに慣れれば次は、先生が適当に描した文字を発声する。

まるでアナウンサーかなにかの学校のよつ

教室全体に初等の一回の声が響き渡っていた。

中には早々とその授業をクリアし、会話の練習にまで発展しているサンタもいる。

クリスはどいつも『ラ行、ザ行』が苦手であるからじへ、じりじしてもまだコツが掴めていないうつだ。

だが、何度も何度も发声し、先生から的確な发声法を教えてもらひうつに連れて

集落に着たばかりの時よりも遙かに

言葉を操る術に慣れてくれるようだ。

2時間授業、30分休憩のサイクルで延々と会話術を学ぶ。授業の中で先生も古代の偉人の言葉や、ためになることわざなども教えてくれるので

会話の質や、言葉の意味も自然と覚えてきているようだ。

「クリスー疲れてない？」

「うん…まだへーきだよ…ロキはびつ？」

「僕もまだまだへーきだーお互ひ頑張りうつなー」

「うん…そうだ…ね

などと他のサンタとも少しづつ会話をしながら

クリスは確実に言葉を覚えていった。

「言葉には『ミコニケーション』を円滑にする他…実は魔法の習得率にも影響があるので」

「より高度で纖細な魔法を扱うには、詠唱と言ひ回靈を放つ技術も必要になります」

「えい……しょ？」

「まだ…まっ？」

先生が聞きなれない単語を使うと途端に一同はポカーンとしてしまふが

それもそのままひきつとわかるよつてなると自分自身に言ひて聞かせ、

早く魔法の習得に移りたいといつサンタが大半のようだ。

初等のサンタ数は約20名。

やはりクリスが一番年齢的には低いが

20名中1-2番目に会話もなんとか合格した。

あとは練習よりはもとよりは会話を繰り返し、慣れれば問題なく日常会話ができるレベルである。

残りの8名もとつあえずは会話の練習には移つてこようつなので

他1-2名はやっと魔法の授業に入る事が許可されたのだった。

やつとサンタはじめ授業が受けれる喜びも感じていたが

クリスは早くこの授業が終わって

自分を拾ってくれた彼とおしゃべりを楽しみたいといつも持ち出しつつここなのだ。

## サンタが鈴を鳴らす理由

やつと魔法の授業に移つた。

先生も話していたよつてこれから酉つ魔法はサンタことつては3種の神器と呼ばれる魔法でなくてはならない魔法らしい。

一体どんな魔法なのか非常に興味深そうに

クリスは田を輝かせている。

「では…会話のテストが終わつた子達は注目へ!」

「これからかなり重要な魔法を教えます」

いよいよ先生が動き、12名に妙な器具を手渡し始めた。

クリスにもそれは渡され、少し揺らしただけで

なんとも耳に優しい金属音が鳴る物であった。

「はい！魔法の説明をします。これから教えるのは『アラーム』と呼ばれる魔法です」

「今手渡した物の音を覚え、魔力を音に変化させる技術が必要ですが…」

「魔力を変化させるという技術は全ての魔法に応用できる基礎のよつなものですね」

「焦らすゆづくつ身に附けていきましょう～これから方法を教えます」

先生は鈴を手に持ち、精神を集中させ魔力を徐々に開放させていく。魔力が少ないものでも、先生の魔力のオーラはすぐに感じ取れたようだ。

うつすらと魔力のオーラが見え始めた。

「「」の鈴の音のイメージが大事です。いきなり音に変化させるのは難しいので」

「まあは「」の音の色をイメージします」

先生の魔力のオーラが徐々に色彩を持ち始める。

同時に一同の耳に優しい鈴の音が聞こえ始めた。

初めて聞く音ではあるが

なぜか心が落ち着くような、いつまでも聴いていたい感覚に包まれる。

クリスも思わず目を瞑りその音に耳を傾けている。

かなりリラックスした表情で聴き入っているようだ。

「はい！では皆さんやってみましょー！」

鈴の音が止まり、いよいよ練習の時間となつた。

まずは渡された鈴の音を覚える事。

これが先決であり、一同は一斉に鈴を鳴らす。

覚えやすごうに耳元で鳴らすサンタもいれば

目を瞑り、ゆっくりと音を拾つサンタもある。

「とか言われてもなあ……僕は魔力の使い方もわからないのに……」

「じゃあ私が教えてあげようか? サタン」

「本当かい? 賴むよクリス!」

重要なのは何度も何度も練習して

無意識に魔力を集中させる事。

互いに教え合い、魔力を扱う技術を身につけ

共に喜び、達成感を味わう事。

人々に喜びを運ぶという仕事をこなすサンタには

必須とも言える感情である。

どうすれば相手が喜ぶか、相手の喜びも自分も喜びとして

自然に受け入れるのが非常に大事である。

サンタが鈴を鳴らす理由は

人々の期待度を高め、食事の確立を上昇させるためだけではなく

初めてアラームを教わった時の授業を思い出し

初心に戻り、喜びを共感する為という意味も含まれているのかもしない。

魔法：アラーム・鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サンタクロースが最初に教わる魔法。

応用すれば全ての魔法を習得する事も可能。サンタの魔法の基礎とも呼べる魔法である。

## 才能の片鱗

まだ魔力の使い方がわからない同級生に

片っ端から魔力の使い方を教えていくクリス。

彼から教わった方法は

個人差はあるものの、万人共通してわかりやすく

尚且つ、扱いやすい方法であつたらしく

すぐに魔力を開放できる者が増え始めていた。

積極的に教えようとするクリスを見ながら

先生も顔を緩ませ、『うんうん』と満悦の様子である。

同級生に教えるたび

クリスの潜在的な魔力も飛躍的伸び始める。

喜びを共感するという事は

自分自身の進歩にも繋がると、クリス自身も嬉しそうな顔をしてい

る。

肝心な会話も

まだぎこちなさは残つてはいるものの

徐々に円滑で聞き取りやすくなるものに変わつてゐる。

満遍なく、魔力の使い方を教えたところで

クリスもやつと魔力変化の練習に移つた。

他の8名の同級生も

なんとか会話のテストはクリアしたようだ

その8名には先生が自ら魔力の使い方を教授している。

先生が教えてくれたようにまずは鈴の音を覚える。

そしてその音のイメージを膨らませ色々を連想させる。

しかし、クリスは生まれたばかりであり

そもそも色事態、それほど数多くは知らない。

見たこともない色を連想するのは不可能なのだ。

「困ったなあ…」

愚痴もこぼせるほど、会話術は進歩しているが

アラームの翻得はかなり難しいらしい。

耳にじびり付くほど鈴の音は聞いた。

何度聞いても色なんてイメージできず

ただ魔力の質が上がっていくだけである。

進展がない事にクリスは少々苛立ちを感じ始めているようだ。

周りを見渡すと

各々が

魔力のオーラに色を加え始めているのがわかる。

ある者は、先生のオーラのよつて縁

ある者は、太陽の光に似ている色

ある者は、日が暮れ始めたときの色

ある者は、あらゆる光を飲み込めるよつた暗い色

だいぶ進展しているのがわかる。

クリスはそのいろんな色を見ながら

自分もどれに該当するのかイメージを膨らませる。

彼から教わった通り

精神を集中させ

体の周りに魔力が漂つて いるよつたイメージを沸かせる。

シャン……

僅かになにかが聞こえた気がした。

自分で鈴を鳴らしたわけではないが

その鈴の音は確かにクリスの方から聞こえた。

先生はいち早くその音に気が付いた。

「あ… まさか…」

表情からも窺えるように

かなり動搖している様子である。

先生の表情の変化に同級生も気が付き

練習を一度止める。

先生の視線の先にはクリスが映っている。

一同もなにがあつたのかとクリスの方を凝視する。

色のついたオーラは出ていないが

力強い魔力の鼓動を感じる。

まるで脈動するかのように

クリスの周りの魔力が震えているのがわかる。

例えるなら心臓のように、ドクンドクンと脈打っている。

シャン…

また鈴の音が聞こえた。

今度は「ハッキリ」とその鈴の音は耳に残った。

.....シャン.....シャン.....

クリスの魔力の脈動に合わせるよう

鈴の音は鳴り響く。

心臓の鼓動と連動しているためか

その音は

心の奥まで響き渡り

なんとも言えぬ安心感と快感を予感させている。

「クリス… できるよな…？」

「すいっ…」

なにかコツを掴んだのだろうか…

教室にはクリスが放つた

魔法：アラームによる鈴の音が響き渡っていた。

あっけなく、魔法・アラームを獲得してしまったクリスに先生も含めた一同は驚愕、同時に賞賛の声を浴びせた。

まさか自分でもすぐに音を鳴らせるとは思わなかつたクリスも自分自身にびっくりしている様子だ。

確認するように何度も何度もアラームを発動させてみる。

力強く、優しい鈴の音が鳴る。

しかし、色をイメージしたわけではないので

クリスの魔力のオーラの色に変化は見られない。

「これは…驚きました…まさか鼓動と運動をさせるとは…

クリスの魔法の才能はすばらしいですねー」

「でも色が…色がわからなくて…」

「大丈夫です！鳴らせられるだけでアームは充分…すばらしい音色です…」

クリスと少し喋るよつとなつた同級生、サタンとロキも称えるよつと言葉を投げかける。

「す、… ク里斯！ 今日きたばつかでもつ卒業じゃないか…」

「もつとクリスに魔力の基礎を教えてもらいたかったけど…」

「え… もつ私は…は…ちや いけないの…？」

アームを獲得したことで

もつは自分は初等教育にこちやいけないのかと

不安に駆られているクリス。

「そんなことはありませんよー 納得いくまで初等にいていいです  
よー。」

「や… ジヤあまだるよ…みんなに「シとか教えたい…」

「とりあえず、クリス！初等教育で教える事はもうないので…卒業とします」

「ありがとう」

「おめでとう！クリス」

褒められる、そして称えられる。

なんとも言へぬ感情がクリスに沸き起つる。

なんだか照れくさそうにもじもじしている。

「さっそく僕にも教えてくれよ！」

「頼むよお～クリス～」

うん

すかさず、ロキとサタンが教えをひきよつに駆け寄る。

クリスは満更でもないよう

自分がイメージしたもの伝え、

「〇〇のよつなものを教えていく。

全員に教えるつもりなのだろうか…

クリスはその2人以外にもアドバイスしていく。

先生の目には、そのクリスの姿はまったく別のものに見えていた。

（まるでこの子は…聖女…ルチア様そのものだな…）

-----

サンタ・ルチア（シラクサのルチア）

実在の人物で、聖ルチアの名で知られるキリスト教の殉教者。

ルーテル教会・聖公会・カトリック教会・正教会で聖人。

目、及び視覚障害者、そしてシラクサの守護聖人。

12月13日に行われるクリスマスの始まりを告げる待誕節

聖ルチア祭が有名である。

クリスの他にもポツポツとアーヴームを獲得していく者が増えてきた。

しかし、魔法には個人差がある為

いくらコツを教えても

なかなか飲み込まれないサンタもいる。

今日の授業が終わる時間まで

クリスはずつとアラームを教え続けた。

結果的に

卒業となつたのは5名。

クリス・ロキ・サタン・シモン・ヤコブの5名である。

数時間しか教えることは出来なかつたが

他の15名もそれなりになにかを掴めていたらしく

途中からクリスが教えなくとも、精進に励んでいた。

結果的に20名中5名の卒業だった事に対して

クリスはやや不満を感じていたが

先生は「充分すぎるほど精進し、その才能はもつと上の教育で生かすべき」と

賞賛してくれ、次からは中等教育について語られた。

授業で名付けられた呼び名だが、

クリス自身、少し気に入った様子だった為

仲の良いロキと一緒に村長の家へ赴き

この呼び名を正式な『名前』として名乗る意思を伝えた。

クリスの他にも、初等教育で名付けられた呼び名を

そのまま『名前』として名乗るサンタは多く

この集落では名前の大半は初等教育で決められた名をそのまま使ってこむよつだ。

クリスは早く、自分を拾ってくれた彼と会話がしたくてたまらず

中等教育の授業が終わるまで

修練所の近くで彼を待つことに決めたのだ。

「クリス…なにをしてるんだい？」

「人を待ってるんだ…」

「人…？知り合いでもいるのかな？」

「うん…私をこの村に運んでくれた大事な人…」

「それは大事な人だね…」

「口キは真っ直ぐ帰りなよ…もうじき口が暮れる…」

「そうだね…明日から中等だけ…一緒にがんばろうね…また明

日…」

口キとの軽い別れの挨拶も済ませ、クリスは彼がくるまで

習得したばかりのアラームを発動させ

鈴の音を聞きながら

空から舞い降りてくる粉雪を眺めていた。

## 彼の名はクラウス

厚い雲で覆われてはいるが

徐々に辺りは暗くなり始めた。

もづき日が暮れ、あたり一帯を漆黒の闇で包まれようとしている  
時刻。

修練所からポツポツと教育を終えたサンタが出てくる。

仲のいいサンタ同士でおしゃべりを楽しみながら

出でるので、おひるは中等教育以上のサンタであるひつと思われる  
る。

クリスは彼が出てくるのをずっと待っていた。

それまでに何度もアラームの練習をしていた為

既にアラームはトーキ並みに自在に扱えるレベルまでに達していた。

魔法は使えば使つほど

精度と質が上昇するが

クリスの魔法の資質は異常とも呼べるほど

それ以上に進歩してくる。

しかし、やはりまだオーラに色を加える事ができず

その事で若干、嬉しさが半減してくるようである。

「あ……」

クリスの目の前に、彼が現れた。

「あー、こんなところでなにしてるんだい？」

彼はクリスがずっと待っていた事など知らず、愛想良く声をかけてきた。

「君がくるのを待つてた」

「え…僕を?なんで…」

「初等教育…卒業しちゃって…」

「ええ…もつ卒業しちゃ…あれ? 言葉が…」

「やつぱつまだ…聞き取り辛いかな…?」

「そんな事なによー完璧じゃなーかー」

「もう…かな…」

「うそそー」わでかめしゃべりができるなー…」

「少し疲れるナビね…」

「少しづつ慣れてこなまここんだよーとこつか良く聽くと…相の  
声は美しくな…」

「美しく…?」

「僕ちゅうと声フロチな部分があつてね…うそそー・ストライク  
だよー」

(「うそ」の意味?)

「え? なんでトーク…」

(なんか喋りづらい…)

「ああ…「あはは」あはー氣になこでね…とつあはは」あはは

れだから…」

彼の言つまま、2人は場所を移動し始めた。

クリスは彼と普通におしゃべり出来てゐる喜びに浸つてゐる。

彼もクリスと言葉で会話が成立した事に満足そうな笑みを浮かべ  
出合つた時以上に喜びを感じてゐるようだ。

「君は…なんて呼び名なの…？」

「ああ…まだ言つてなかつたね！僕はクラウスだよ」

「クラウス…か…クラウス…」

クリスは何度も咳き、忘れないように記憶してゐるようだ。

「君はなんて呼び名をもらつたの？」

「クリス…」

「クリスか…良い呼び名だね…うん…似合つてゐるよ

「クラウスも似合つてゐる…」

「そりかね？よく顔と名前が合つてないって言われるけどね…」

「顔…確かに…クラウスじゃないかも…」

「えええーそこ認めちゃうのか…」

「ふふ…冗談だよ…クラウス…」

「なんだ冗談か…一瞬ほんとに亞沙江だつたよ…あはは…」

移動しながら冗談も交え、仲良くなじゅべりを楽しんでいるようだ。

クリスはアラームに関して、クラウスに聞きたい事があつたようだが

そんな事も忘れて会話に夢中になつている。

クラウスはそんなクリスの心情はわかるはずもなく  
純粋に会話を楽しんでいる。

「明日から中等教育だつて…」

「自信ないとか?」

「自信なんてあるわけない…でも…楽しみ

「大丈夫!クリスならすぐ卒業できるわ!」

「クラウスと一緒に……？」

「タイミングがちょっと悪かったかも……僕は今日中等は卒業しちゃつて……」

「そり……」

「でもさー上等教育は……すゞハーダルが上がるから……そこで一緒になるよきっとー」

「うん……でもクラウスは……私よりも上にいて欲しかったから……」

「それはそれでフレッシュシャーだなあー」

そういうことになり、2人はクリスの家の前まで来ていた。

「明日もまた同じ時間から授業あるから……今日はゆっくり休んでー！」

「そりする……クラウスもゆっくり休んでね」

「あはは……言われなくても家に帰つたら、死ぬよ！」やうやう

「クラウス……死なないで……」

「冗談だつて！そんな顔しないで……ね？んじゃーおやすみークリス

「うん…おやすみ…クラウス」

クラウスは踵を返し、元着た道を戻り始めた。

クリスはクラウスが見えなくなるまで

彼の後ろ姿を見つめていた。

「クラウスか…ふふ…やつぱり…似合つてないかも…」

軽い笑みをこぼしながら

クリスは早々に寝床についた。

悪夢なのか…それとも予知夢なのか…

目が覚めたクリスは目の前の光景に驚愕していた。

昨日は絶対に自分の家で寝たはずなのだが、

今いる場所は見たことない場所だつたからだ。

大勢のサンタが集まり、クリスの知らない魔法を発動させてくる。

見たことない顔ばかり

集落のサンタの顔も碌に覚えていないが

それとは関係なく知らないサンタばかり…

彼らの視線の先には

自分らとは打って変わり、全身黒い衣装を纏つた集団。

向こうも魔力のオーラが肉眼で見えるほどに

魔力を開放させ、なにかの魔法を発動させている。

一体、なにが起きているのか…

クリスは必死に考えているが…どうしてこのような場所にいるのかも  
まったく見当が付かず、困惑している。

先頭のサンタが雄たけびのような声を上げると同時に

周辺のサンタが一気に、黒い衣装の集団に向かつて走り出した。

なにか只ならぬ事態になっていることだけはすぐに理解できた。

向こうも嵐のよつな雄たけびを上げながらこちらに向かつて走り出  
してきた。

表情は見えないが…

悪意や殺意のよつなものは感じられる。

魔力の質も明らかに人を喜ばせるよつなものではなく

ただ『殺してやる』と言ったげに、邪悪な質感を持っている。

「殺される……」

クリスは恐怖を感じ、目線は黒い集団を見ながら思わず後退りしてしまつ。

視界の端に見慣れた顔が現れた。

「クラウス……！」

それは昨日やつとおしゃべりを楽しむ事が出来た彼、クラウスその人だ。

目の前のクラウスは

今までクリスに見せた事もない表情で、走り出している。

「待って……クラウス……クラウス……！」

クリスは必死になつてクラウスの元へ向かおうとするが

他のサンタが邪魔で思つように前には進めない。

「だめ……死んじゃう……殺されちゃう……！」

明らかに黒い集団の魔力は

まだ魔力が弱いクリスにもその強さの質は理解できる。

クラウスの今の魔力では、全く勝ち田がない事もすべに理解できた。

黒い集団の先陣が

こちらのサンタに向かつてなにかを発動させた。

黒い霧のようで…嫌な質感をもつた煙。

瞬時にこれはやばいーと悟ったクリスは息を止める。

バタバタとその場に倒れていく。

おやりく、致死性の猛毒であるとすぐに判断できた。

黒い霧でほぼ視界を奪われた為

走つていくクラウスの影も見失つてしまつた。

(無事なんだらうか…この霧を吸つてしまつてないだらうか…)

やはつ頭に過ぎぬのはクラウスの呪術ばかり

しかし、自分にはこの霧をなんとかする力も

前に進む勇気もなく

ただその場で棒立ちになるしかできない…

「うおおおおおおおおおお…」

昨日寝る直前まで聞いていた、クラウスの声が聞こえた。

その刹那！

場面が一転し、黒い霧が晴れた。

クリスの目の前には顔見知つた2人。

しかし、その2人が着ている服は赤ではなく

全身真っ黒で邪悪な衣装。

表情も、昨日見せた柔らかな表情でなく

明らかに殺意を剥き出しにした凶悪な表情だ。

「ロキ……？ サタン……？」

思わずその名前を呟く。

「久しづびりだな…クリス…」

その言葉には昨日までの温もりはなく

思わず耳を塞ぎたくなるような、嫌らしい感じの粘り気が混ざつて

いふよつな声。

「クリス……なんでお前はまだ赤い衣装なんて着てるんだ……」

「早く俺らの仲間になれよ……」

意味がわからない言葉を投げつける2人。

「クリス！逃げろ！……」

真後ろからクラウスの叫び声が聞こえた。

「クラ……」

その名前を最後まで言つ間もなく

クリスの目の前にクラウスが現れた。

一体なんでこんな状況になつているのか把握できません

とりあえずあの黒い霧は吸つていなかつたのだと

そこだけは理解できたが……

「ロキ……サタン……貴様ら……絶対にゆるさねえ！」

クラウスは怒りを露にさせ、殺意を持った魔力を開放させてくる。

「これはこれは……クラウスの旦那じゃないですか……」

「敵陣のエースがこんな場所にいるとは……くくく……」

しつとりした嫌らしい笑みを浮かべながらも

2人の表情には余裕すら感じられる。

「だが……負の心を食つた俺らの敵じゃない……」

「サタンの出る幕はないな……俺一人で充分だ……」

ゆつくりとロキが前に出る。

同時にクラウスは構える。

「クリス……僕が合図したら迷わず逃げるんだ……」

どこか懐かしさすら感じる優しい声でクラウスは注意を促す。

「なんで……こんな……」

目の前の状況に混乱しているクリスは

クラウスの言葉も碌に理解できていないうつだ。

「いけ！逃げるクリス！」

後ろを振り返る事なく、クラウスはロキに向かつて走り出す。

昨日最後に見た後ろ姿とだぶる。

しかし、ロキは既にクラウスの視界から消えている。

「雑魚が……」

ロキはクラウスの真後ろに平然と立っていた。

そして、左手に持っている良く切れそうな剣を振り上げる。

「ああ……ああ……」

鮮血が迸る。

積雪に夥しい量の血の雨が着色されていく。

自分がもつとも安心できる色だと感じていた赤。

しかし、今のクリスの顔には

恐怖、憎悪、混乱、あらゆる負の感情が合成された色にしか見えない。

「いや……いやあ……！」

その場に崩れ落ちるよつてクリスは尻餅をついた。

「弱い者の宿命だ……悲しむ事はない……クリス」

サタンが意味のわからない言葉を投げかけてくる。

「弱者は命を落とし、強者が生き残る……これが道理……お前はどっちだ？クリス……」

はつ……と田が覚めた。

田の前には木造の屋根が見える。

見慣れてはいないが

「」は村長に『』された自分の家である事はわかった。

カレンダーは自動で更新され、日付は11月21日と表示されている。

「夢……か……」

クリスはホツッと胸を撫で下ろし、朝食代わりにお茶を入れた。

「一体今の夢はなんだつたのか……」

「ただの夢であつて欲しいと祈るしかなく

クリスは身支度を整え、自宅を後にした。

魔力の高いサンタの夢は予知能力の一種らしい

修練所へ向かう最中、クリスはクラウスと合流した。

クラウスはクリスが見た悪夢など知るわけもなく、  
なんら変わらない笑顔を向けてくる。

クリスはやはり先ほど見た夢が心に引っかかり

うまく笑顔を作れないでいる。

「どうしたんだい？今日は元気なさそうだけじ…」

「ん…そんな事ないよ…元気」

所詮ただの夢だと自分自身に言い聞かせ、何事もなかつたかのように

いつもどおりに接しようとすると

なかなか気持ちを切り替える事ができなかつた。

「なにか…よくない事でもあつた？」

「大丈夫だよ？」

クラウスはクリスを心配し、気遣つてゐるよつに今日の会話は少ない。

「ちよつと変な夢見ちゃつて……でも夢だから……」

「夢……」

クラウスは途端に深刻そうな顔になる。

クリスはその表情の変化は見逃さなかつた。

「クラウス……？」

「外れるといいね……」

「外れる……？」

「魔力が高いサンタの夢つてさ……予知能力の一種なんだ……」

「予知……？」

「これから起らぬかもしない事を夢で見れる能力だよ……」

「え……」

「大丈夫だよ！クリスはまだ魔力が弱いから……きっと外れるつて

！」

「それって励ましてる?」

「あ……うふー…やうだよー…クリスはこれから魔力を育てるんだから  
やー…」

「なんか…複雑…でもありがとひ」

まだ魔力が弱いと言われるのは少々癪に障つたらしいが

クリスは元気を取り戻したようだ。

「おはよーーークリスーーー」

「おはよーーー」

後方から元気な口キとサタンの声が聞こえた。

「あ… おはよーーー」

「おーークリス！ 友達が出来たんだねーーーおはよーーー」

「あーークリスが昨日言つてた大事な人さんおはよーーー」

「口キ… それは名前ではないと思つたが…」

軽く自己紹介を済ませ、そのまま4人で修練所まで向かうことになつた。

クリスはまだ夢が引つかかっていたが

4人で楽しく会話をしながら歩いていくうち

こんな明るい2人が黒く染まり、しかも

クラウスを殺すなどありえない！と確信にも似た考えに変わり

やつといつもどおりの明るさを取り戻したようだ。

「中等修練所は2階だから…僕はここで…」

「あ…クラウスさんはこの上なのか…」

「さすが…クリスの大事な人はランクが違うなあ…」

「もおー！結構恥ずかしいから大事な人とか…連呼しないでよロキ！」

クリスはロキの腕を引っ張り、引きずるように中等と書かれたドアを開いた。

サタンも苦笑いをしながら2人の後に続いた。

「大事な人…か…」

クラウスはニヤニヤしながら3階へ向かっていった。

## 黒い歴史

中等教育の修練所に付いた3人は  
空いてる席に着席した。

中の作りは初等修練所とそう変わらず、黒板や教壇  
電飾などの配置もほぼ一緒だった。

昨日一緒に卒業したシモンとヤコブは既に着席し、先生を待っている  
ようだ。

他にも目視で約30名ほどのサンタが各自の席に座っている。

しかし、初等とは違い

各自仲の良いサンタ同士で雑談をしていて

賑やかな雰囲気である。

やはり、中等でも女はクリス一人だけのようである。

やはり、前触れもなく定刻になると教壇のあたりに先生が立つてい

た。

「はーいー雑談をやめてー！」これから授業をしますよ

初老ビジウムかもつ老年に達しようとしている外見の  
いかにもサンタと呼べる先生が一同を制した。

「今日は初等から5人の新しいサンタがきましたので、皆さん仲  
良くしてあげて下さい」

最初はまず自己紹介から始まるのが修練所の流儀らしく

クリス達は手早く挨拶を済ませた。

「ではさっそく始めます。今日もまずは歴史の授業から…

日々の机の上にはいつのまにか教科書が置いてあった。

しかし、教科書にしては非常に薄く、まるで絵本を思わせるような  
絵である。

この教材にそつて歴史の授業をするようである。

「いいですか…この授業の後にどこまで理解できたのかテストをしますので…

それに合格した人は魔法の授業に移ります。

できなかつた人は教科書を暗記するまで読んで下さい」

サンタの歴史を知る事、それもサンタにとつては非常に大事な事であります

先人のサンタの功績を知る事で自身のサンタのあり方も考える事が出来るようだ。

まずは自分が何者なのか知るという点では

歴史の授業は非常に効率の良い手段と言えよつ。

-----サンタのお話

昔々、まだサンタがいなかつた時代。

北の大地に4名の男女がいました。

彼らは非常に寒さに強く、水と空気だけで何百年も生きていける  
変わった種族に属していました。

1人は他の3人を非常に大事に扱い、4人の中ではリーダー的存在で  
なにか行動をする際には絶対に、彼の判断が必要不可欠でした。

1人は4人の中では唯一性別が異なり、女でした。

彼女はとても優しく、暴力の類には真っ向から否定するほどに  
非暴力主義な人物です。

1人は4人の中でも非常に身体能力に優れ、一番足が速く力持ちで  
した。

彼の考え方はどうすればもっと強くなれるのかと

強さを重視する性格です。

1人は力こそのものの、4人の中では断トツに魔力に優れ  
様々な奇跡を呼ぶ不思議な魔法を扱えます。

そんな4人でそれはそれは幸せに暮らしていました。

決して争う事はせず、喧嘩もなく、毎日遊んでいたそうです。

そんな彼らの前にある日、1人の神様が現れこう言いました。

「君達はあらゆる種族の中でも非常に完成度の高い種族だ。

そんな君達に1つお願い事があるのだが、きいてくれないだろうか

？」

もちろん返事はOKでした。

毎日遊んで暮らしていたとはいえ、なにか目的が出来ると言つ事は

彼らにとつては最大の喜びだったからです。

神様のお願い事は。

『他の種族を幸せに運んでもらいたい、4人で知恵を出し合つて見てはくれないか』

これは難題です。

4人はさつそく知恵を振り絞り、様々な意見を出し合いました。

1人はその種族が望む事を我らが率先して手助けしてあげたらどうか？

1人はきっと我らが望む事こそ全ての種族が望む事であるのではないか？

1人は望む事を叶えるのではなく、その種族を喜ばせてあげる事こそ幸せなのではないか？

1人はその種族に害を与える種族を滅ぼす事こそ、平和に繋がり幸せなのではないか？

4人の意見はバラバラであるで噛み合いませんでした。

それから何十年も同じ話題でよく考えた結果

4人の中のリーダー的存在の1人が結論を出しました。

「では各自の考えをそれぞれ、まずは実践してみてはどうか?」

その意見に全員が賛成、さつそく4人は行動に移りました。」

結果。

2人は聖と呼ばれ

2人は魔と呼ばれるようになりました。

各自の意見の違いから仲が良かつた4人で

喧嘩が起る事もしばしば…

そして…2人は北の大地に残り

2人は南の大地に移りました。

北の大地に残つた2人は結果的に

神様が言つた願い事を完遂できました。

南の大地に移つた2人は結果的に

人々に幸せを運ぶどころか逆の行いをしてしまい

神様に封印されてしまいました。

しかし、北の大地に残つた2人は

そんな2人をどうにか許して欲しいと神様に頼みました。

神様は2人に条件を与えます。

『では…今まで通り人々に幸せを運ぶ仕事を続けなさい

1年に一度で結構だが、もしうまなかつた場合は封印する』

かなり厳しい条件ですが

2人はそれで、封印されてしまった2人を許してもらえるのならばと  
条件を飲みました。

それがサンタの始まりとされています。

北に残った2人の名前は

4人の中のリーダー： ニコラウス

4人の中で唯一の女： ルチア

南に移った2人の名前は

4人の中で一番力が強い男： クランプス

4人の中で魔力が一番強い男： シャープ

ンタのお話・完

-----サ

各自が先生の話を聞きながら、絵本を読み

サンタの歴史を学んでいった。

おやじく、歴史として学んでいるといふことは

史実に基づいた事実であると各自が理解を深めていった。

頃合を計り、やつやく先生はテストを始めた…

作るのではなく具現化する

先生が問ひ。

生徒はそれに答えると言ひた簡単なテストだった。  
しっかりと先生の話と絵本を読んでいれば答えられる問い合わせばかりだ  
った。

『君ならどこの意見に賛同しますか?』

『もし、クランプスとシャープが復活した場合どうなると思いま  
すか?』

などと、よく考えなればならない問い合わせもあった。

文章を読み、理解し、考えるといつ

会話術よりもより高度な言語力が試されるので

なかなかクリアできるサンタがない。

クリスも必死に絵本を読み、内容と自分なりの考えを深めるが

なかなか先生の問いに答える事ができず、悪戦苦闘していた。

数名、おやじくは中等に長へる生徒が歴史の授業をクリア。

各々、先生に許可されて魔法の特訓に励んでいた。

さすがは先輩といったところである。

何度も何度もテストに挑むが

その都度、問い合わせの内容も変わり

前回の問い合わせの答えを考えてもまるで無駄になる。

すぐ高度な授業だとクリスは痛感していた。

ロキ・サタン・ヤコブ・シモンもこのテストにはやはり悪戦苦闘しておる

なかなか合格がもらえない。

どうすれば合格がもらえるのだろうか… ではなく

もつとこの絵本についてよく考えなければと思ふを巡らせるクリス。

サタンとロキの意見も聞いてみた。

「サタンは…どの意見に賛同する?私は…3番目だけど…」

「そうだね…僕は…一番下だね…平和を望む心は賛同できる…」

「やつぱみんな違うんだね~僕は断然2番目だね~…一番優れてい  
る種族なんだからさ…」

それぞれの見解で理解している為

1人で考えるよりもなにかが掴めそうな予感がしていた。

もう何度目のテストなのか数えるのも止めてしまつたが

クリス・サタン・ロキの3人はなんとか歴史のテストに合格をもつ  
つた。

これで全員が合格となり

生徒は全員魔法の授業に移る事になつた。

「みなさん!話を止めてください!」これから魔法の授業を開始し  
ます

いよいよ、中等教育での魔法の授業。

一体どんな魔法を教えてもらひえるのか

クリスは胸を高鳴らせて いる。

「適材適所という言葉があります。この言葉は人に対して使うものですが… 本来は…

例えば、豊富な森林があればその木々を利用し、

建築するといったその場にあつた材料を

有効に利用すると言つた意味が込められています

「我々、サンタの世界でもそれは同様ですが、そこで魔法を応用するのがサンタです。

物を1から作つていては… 限りある時間を浪費してしまい、チヤンスを逃してしまつ

… では、どうするか… 簡単な事です… 具現化すればいい

「そこでは皆さんは魔力を具現化する魔法『エンボディ』を伝授します」

## 魔法：エンボディ

その場に呑わせて必要なものを具現化し、利用する事ができる魔法

数多くのサンタは移動する為に

具現化する時に  
動力が付いたソリや、浮遊能力が付いたソリを

この魔法を使う場合が多い。

更に、リスニングとエンボディを応用し

相手の望むプレゼントを具現化させ、

人々に喜びを与える場合にも使用する。

「すいぐ……便利な魔法……」

「もし……習得したら……移動が楽になるな……」

「これはなにがなんでも習得しなきやな！」

仲良し3人組は食い入るように先生の魔法の説明を聴いている。

発動方法や、アラームの応用の仕方、コツなどの講義も始まった。

音とは違い、質量を持つたものを形にして存在をせるため

アラームやトークよりも膨大な魔力が必要になる。

説明を聴いた限りではとても一日で習得できるレベルの魔法ではない事は理解できた。

「まずは基礎の魔力を高める事が先決です。

皆さんには既にアラームを習得していると思いますので、その魔法を使って

魔力の絶対値を上げていきましょう

教室中にアラームによる鈴の音が響き始めた。

リンコンコンコン……

シャンシャンシャンシャン……

ゾンビヤララ～……（笑）

人によつて鈴の音は異なり、まるでオーケストラのよつて  
聴いているだけで心地の良い旋律を醸し出している。

クリスは既にアラームは必要最低限の魔力で発動できるまでに至つ  
ている為

このままでは魔力は上がらない。

全員がアラームを発動している中ビリすればいいのかわからないで  
いた。

（素晴らしい才能ですね…クリスさん…一つアドバイスをしておきます）

先生がトークで話しかけてきた。

（必要以上の魔力でアラームを発動させてみなさい。それで魔力が上昇していきますよ）

（ありがとうございます…コントロールが難しそうだけビ…やってみるよ）

助け舟のようなアドバイスをもらひ、やつとクリスもアラームを発動させ

魔力の上昇訓練を開始させた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6068z/>

---

Battle Santa

2011年12月21日18時49分発行